



TITLE:

<大會抄録>中國紡績業の「黄金時代」

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. <大會抄録>中國紡績業の「黄金時代」. 東洋史研究 1982, 41(3): 603-603

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153864>

RIGHT:

ハンバリー派の政治論の變らない部分と變化した部分を、十一世紀のイブン・ファッラーと十四世紀のイブン・タイミーヤという、同派の法學者の中ではこの分野で特に顯著な業績を残した二人の人物の政治論を比較することを通じて、いく分なりとも明らかにしてみたい。

イブン・ファッラーについてはその著 *Abkam al-sulṭāna* (統治の諸原理) を、イブン・タイミーヤの場合は *al-Siyāsa al-sharīʿa* (イスラーム法の政治) という本を取りあげて、その内容の重要なポイントを比較検討していくことにする。

中國紡績業の「黄金時代」

森 時彦

一九一九年から二〇年にかけて、中國紡績業は綿糸一捆當り五〇兩という未曾有の高利潤にうろつた。その結果、紡績業への投資はブームをよび、僅々四、五年の間に紡錘数は三倍近い激増をみた。中國民族工業の「黄金時代」をきづく原動力となったこの紡績業勃興の原因については、従來の研究では多く、第一次世界大戦の影響による根強い國內需要の擴大と、それに續く國內市場の「紗貴花賤（製品高の原料安）」という、いわば現象面だけの説明が當てられてきた。

本報告では、當時の中國紡績業の發展段階を考慮にいれつつ、綿糸價格と棉花價格（とりわけ後者に重點を置いて）の國際比較をこ

ころみることによって、紡績業にとって理想的な「紗貴花賤」という環境が、何故にはかならずこの時期に中國市場にもたらされたのかという問題を解明したい。この分析は、中國市場の構造的特質を通じて、中國紡績業の「黄金時代」なるものの實態をより鮮明にすることを可能にすると同時に、第一次世界大戦後の東アジアにおける綿紡績工業の展開過程の中で、中國紡績業のおかれていた位置とそれによって規定された限界をも、間接的にはあるが明らかにできるのではないかと思う。

張謇と東南互保

藤岡 喜久男

張謇の東南互保への關與は、C. タン、S. チュ、李國祁氏が夫々既に觸れられている處であるが、ここではそれを、張謇の「柳西草堂日記」同「年譜」、彼と關係の深かった劉厚生（劉垣）の「張謇傳記」惜陰（趙鳳昌）の「庚子拳禍東南互保之紀實」盛宣懷・劉坤一・張之洞・李鴻章の電稿、及び日英の外交文書等々によって、より明確にし、張謇のその後の立憲運動・辛亥革命への關與の性格を考察する手掛りとしたい。

内容は、(一)タン・チュ・李三氏によりつつ同約款が劉・張・李三總督の東南の平和維持政策と盛ら上海官紳の約款締結提議・協力の結果であることの紹介、(二)その上海官紳の一人とされる張謇（進士、實業家）が、舊知の沈瑜慶（舉人、文肅公の息）等々と共に、